

名城大学 経済・経営学会会報

No.10

『名城論叢』
第三卷 第二号 付録
二〇〇二年九月三〇日
名城大学 経済・経営学会 発行

環境と経済……………松尾秀雄	1
三回目のテイハイクを終えて……………洪井康弘	7
アルバイト「学生」と就職の……………杉山 清	12
ミスマッチ……………見る	
読書案内「構造改革で見る……………山田浩貴	30
夢の行方は？……………	

環境と経済

経済学部教授 松尾秀雄

環境の問題を論ずる場合、経済理論の分野においては、従来の理論の体系との整合性において、納得の行くような説明が存在しなかった。環境経済学という新しい学問領域が着目されつつあるが、それがあたかも従来の経済理論とはべつの領域の学問であるかのように発展しているのは、従来の経済理論の諸潮流のほとんどにおいて、その理論の諸前提と環境の諸問題がうまく噛み合わないからだと思われるのである。

このエッセイでは、研究者が自分のテーマを開拓する時の舞台裏を少しだけお見せしたい。環境問題は経済の理論の枠に納めにくい微妙な問題なのだが、本格的に考察を始めた課題になりつつある。

名城大学に総合研究所が設置されて何年か過ぎたが、環境の問題を共通にテーマとして取り上げようということになったら

しい。年に一回だけ出版される総合研究所の紀要に二〇〇二年度の号では環境問題の特集が組まれた。じつは、昨年の末に、総合研究所委員で編集委員を兼ねている経済学部の同僚から、総合研究所の紀要に原稿を書いてくれないかと依頼された。テーマは環境問題だといわれた。そのときは、頼んだ人が親しくしている教授だったので、気安く引き受けた。文献を詳細に紹介するよりも、大きな考え方を示してほしいという注文であった。普通はテーマを指定されることはまずないが、環境といわれて大いに動揺した。なぜなら、短大に所属していた時期に、これまた親しくつきあっているI教授に、専門を環境経済学にシフトしてみないかと半ば冗談めいていわれたことがあって、理論を捨てて環境経済学をやるという発想がよく理解できず、理論を続けると笑って答えた経緯が脳裏をよぎった。しかし、広義の経済学を目指す以上は、いずれ環境問題にも理論の枠を設定し直しつつ取り組まなければならなくなろうと漠然と考えていた。

今まで、わたくしの研究の履歴は、経済理論を中心とするものであった。とりわけマルクスや宇野弘蔵の学説を中心に研究しては来たが観念の理論ではなく、現実の人間の行動に即した理論としてのマルクス経済学の理論構築に没頭してきた。いう

までもなく、理論の世界の人間は、従来の経済理論の想定では、自己の利益最大のみを求める個人としての商品所有者ないし資本家という経済人だと考えられて来たのであったが、実は個人としての人間はなんらかの共同体の一員でもあると把握しなければならぬ、集団を優先する行動が資本主義でも多く見られる、という、共同体を射程に入れた理論づくりをさまざまな機会に主張してきたのがわたしの研究スタイルであったわけである。

この共同体の問題もそうであるが、環境の問題もマルクスや宇野理論の枠組みの中にきちんと納まってはいないのである。仮にわたしに原稿を書いたらと誘ってくれた同僚をS教授だとすると、そのS教授がいうには、あなたは理論の分野に共同体の領域を開拓しようとしていられる、環境の問題はまさしく共同体の問題でもあるのだから、書けるはずだ、正月があけたら総合研究所に原稿を提出してくれ、編集は自分に任せてくれ、とおっしゃるのである。書きましよう、と約束してしまつた。それが手形の不渡りになるのも知らずに。資源が有限であることも、自分の欲望充足行動が他人に意図せざる結果をもたらすことも、狭義の経済学では触れられてこなかった事柄であり、興味を感じたのである。玉野井芳郎さんが生前、広義の経済学を主張されたが狭義の経済学はびくともしなかつた。

年が明けて二〇〇二年がスタートした。

色々と構想を練つたが、環境の問題を従来の狭義のマルクス経済学にすつきりと接合するには、根本から経済学の諸前提を塗り替えねばならない。共同体を理論の課題に設定するときは

どうだったかといえ、人間の集団生活と資本主義社会の原理を接合させなければ、現代を分析しうる道具としての理論にはなりえないという思いで、本当に必死で考えた。その結果を二冊の著書にして発表した。このことは、現実が経済学の想定と齟齬を来しているという問題意識を突き詰めれば、やはり経済学を現実に合致させる方向が筋であり、人間は個人としての孤独の存在ではなくて、共同体の一員であるという命題をとことん純化して、資本主義社会でも共同体は指定される、共同体は死滅していないのだ、例えば会社がひとつの共同体の例であろうし、家族をもたない人もいるかもしれないが、家族共同体が人間の生きる基本の共同体である、と。このように、理論としても前提を変更すべきだと主張すれば、道は開けた。理論の研究者が道は開けたというときは、オリジナルだと信じるアイデアをひねり出したときである。しかし、事情があつて、とある共同研究のグループにも所属しており、わたくしは中国の郷鎮企業（中国の農村部に展開する小規模の自発的な企業形態のこと）の研究を同時に行っていたこともあり、そちらの研究のための締め切りが優先された。時間に追われ、また自分のアイデアにも追われていたというべきか。共同体と環境のリンクがすんなりとは解明できなかつたのである。

環境の論文も書くことがあがいてはいた。自分ではマルクスの古典やアダム・スミスの古典を読むのは刺激になるので、何度も繰り返し読んでいたが、とくにアイデアの宝庫はマルクスの場合では、『経済学批判要綱』だと信じて読み返したが、これらの古典には環境変化の問題意識は読み取れるものの、理論とし

ての整理に問題を絞り込むと、するりと抜け落ちてしまうのである。じつにさまざまな著作の中で、労働者が労働の環境によってガスを発病するとか、蛾の色がイギリスの工場から出る排気ガスで黒ずむとか、事例としてはマルクスもエンゲルスも豊富に語っているのである。人間のあり方も自然のありかたも資本主義によってずいぶんと歪められてしまう。そんな思いはずっと抱いていたが、資本主義だから発生するというのも、よくよく考えればおかしい話なのであって、例えば喫煙の習慣を考えてみれば明白なように、自分の喫煙行為が周囲の人々に不愉快な思いをもたらすのは、資本主義の体制の社会であつても、社会主義の体制の社会であつても同じなのである。問題は資本主義批判という側面では不十分だということであり、そして、最大の難問は、他人がどのように自分の行為を評価するのかという問題である。例えば、誰もいない広大なアメリカのような土地では深刻ではない。バイクがうるさいと文句も言われない。人口密度が高いとたちまち摩擦が発生する。このように曖昧な側面があり過ぎるのである。

水俣病以来、利潤追求を唯一の行動原理として正当化するような資本主義的企業は生き残れないことが明らかになったのだと思う。しかし、どの教科書にも、資本は利潤追求を目的とした価値増殖運動体としか書かれてなく、このようなモラルの問題を与件として設定した理論の体系は存在せず、共感や他人の目の存在をミスが分析したにもかかわらず、このモラルや道徳、社会的な責任の問題という人間の実際の行動様式の問題は、解決されずに経済学者の難問として残されるのである。

従来の理論の前提がどんなものか、地代論を例にとつて説明する。人間の小麦需要は労働者が無限に増大するのに伴つて無限に増大する。土地はすべて地主階級が独占的に私的に所有している。農業用地は借地農業資本家によつて肥沃な優等地から順に借地される。それでも需要が拡大するから、遜減的に地味が悪化する劣等地にも耕作が広がり、それでも平均利潤が獲得されるだろう。平均利潤で満足できず、資本家はより大きい超過利潤を得ようとして、優等地の借地をめぐる競争が発生して、農業資本家の得る超過利潤はすべて差額地代の第一形態として地主のもとに支払われる。

環境の視点をここに導入するとこうなる。農地は有限であり、しかも連作により地味も落ちる。化学肥料を使うと味がまずくなる。有機肥料を過剰に投与すると、川や海を汚染して有機物が分解されない富裕な海となり、プランクトンの異常発生、泳げない海となつてしまう。森林破壊はもつてのほかという共通感情が形成される。しかも穀物需要は消費の多様化によつて減少し、農産物の価格は過剰生産のつげが回つて、下落傾向が続く。農業で平均利潤を獲得することは困難となり、過疎の問題が発生する。地代の発生は論理としては説きづらくなる。そればかりではない。有害な農薬が人体に悪影響を及ぼす。その使用禁止は、資本の論理からは生まれず、社会全体のルールが行政や立法の発動によつて実現する。それでもマナーの問題は残つて、ルールを破つて、有害農薬を使用する生産者はなくならない。

このように考えてくると、理論の授業ではなく、むかし、大

塚史学の西洋経済史で習った、経済外強制とか共同体規制の事例が想起される。中世の農奴たちは村という村落共同体によって、何を作物で植えるとかこまごまとしたことで村落共同体という全体に強制されていた。その村の規制に反すると、村八分にあった。環境のことをかんがえる契機は資本家に国家や社会の共同体規制が効き始めてからである。効率性を否定することなど誰も予想していなかった。しかし、自分本位のエゴだと指摘されるような知恵が発達する。環境の破壊をするような企業は新聞でたたかれ、不名誉な思いをする。そこで企業は競って、利潤動機というよりも名誉動機といった方が適切な宣伝行動に打って出る。宣伝ばかりでなく、実際に企業が植林のボランティアを開始したりする。消費者は、あそこの会社は環境問題を真剣に考えて、よいことをやっている、地球にやさしい商品を高くても買おうかと評価の基準が変化してゆく。あるいは自分の健康を守るという発想が出てくる。

しかし、経済活動が熱や二酸化炭素を放出するものであることもまた厳然たる事実である。プラスチックが地球温暖化現象を紹介してゆき、人々の意識も変化する。例えば、ツバルという南海の島々の国では、ここ何十年かの間に海面が約1メートルも上昇したせいで、家が水没するという事態になった。島民は隣国のニュージーランドへと移民をしなければならなくなる。そうなると生活の習慣が激変する。では先進諸国の経済活動を縮小するように、地球全体の共同体規制が会議で決められ、強制が発揮されるか。これはしかし、生活水準をおとせないと抵抗にあうだろう。

新年が来て、最初の教授会が開催された。さっそくS教授にお会いした。

「原稿はできましたか」「いえ、出来ませんでした」なんとも惨めであった。

自然の環境を、その破壊の程度は、貨幣価値に換算するといくらになります。だから環境保持の費用はこれこれです、みたいなコストにすべてを還元する、安直で曖昧な方法では私自身の理論家としての矜持が許さなかったのである。また自然科学的な環境分析も、二酸化炭素が発生する、地球の温暖化現象が発生するみたいな自然現象の因果を実証することも自分の過去の研究の歴史からして不可能だったということもいうまでもない。とにかく研究が実質的に着手されなかったのである。拙速はさげねばならない。

さすがにS教授はがっかりされておられた。本当にすまないと思っている。

春になって名城大学の新しい総合研究所紀要をめぐって見たら、なんと環境特集でも経済学の観点から環境を論じた論文が1本もない。しまったと思ったときは後の祭である。近代経済学には、外部経済・外部不経済という大層立派な概念装置が有効に作動している。騒音は外部不経済である。だが、マルクス経済学は、社会主義の崩壊という事件でも、社会主義の崩壊と分析理論としての有効性の問題とべつなのに、確実に評判を落としたり。にもかかわらず、環境問題にもコミット出来ないとするれば、ますます世間は評価をさげるかもしれない。経済学の理論家たるものはその時代のトップの課題を理論的に解明し

て見せる義務があるのだと、忸怩たる思いに駆られたのである。名城にも経済理論のメンバーは健在なのである。

折しも名城大学は環境基準の認定である「TOI4001」の取得に向けて全力を傾けていた。社会学者が環境を理論化できなくてどうする。この思いに駆られるようになった。しかし、自分の金儲けに熱中してよろしいと国家が容認し始めた中国人人々に、金儲けに熱中することは、同時に地球環境を破壊することにもなりかねないので、金儲けをどうか控えめにしてくれないだろうか、と懇願しても、無理だと断られるように、経済学はこの自分の利潤最大化を行動基準とする人間の設定で出来上がっていて、どうか社会のために環境保全にご配慮をと懇願しても、貧しければ、まずは自分の利益が優先するだろう。ひと昔前の日本がそうであったではないか。そのような現実の資本主義があればその現実を前にして、環境問題は経済学の前提にはなつてませんから、そんなのは理論の世界ではそもそも無理です、という形式的な答えしか返つてこない。したがって何よりも自然が変化することは重大な問題であると人間が認知にめざめなければならぬ。

近代経済学者でわたくしが個人的に尊敬するのは、いつも本郷の経済学部のお会いした宇沢弘文先生である。ジョギング姿の宇沢さんをよくお見かけした。その宇沢さんが懐かしくて、今年のゼミでは、学生に宇沢先生の御著書を筆写させるという課題を出しながら進化した。ゼミのテキストは『自動車の社会的費用』という岩波新書であった。学生に意見を聞いてみた。自動車が路地裏の道路を疾走している。そこにちいさな

子供が遊びに熱中している。車が子供を撥ねて死亡させた。さでどう思うか、と。ほとんどの学生は、車が通る路地裏で子供が遊ぶのが間違っている。子供は公園で遊ぶべきだ。車の利便性を犠牲にすべきではない、と。他者の痛みという想像力を要する感性がまだまだ鈍かった。ところが、テキストの本文では、車が人間の生活空間に侵入してくるのが間違っている。車は、車専用の空間を走行しなければ交通事故で子供が死亡する悲劇を防がないではないか、社会的な費用を負担して、他人の痛みを感じつつ自動車を運転すべきだと書かれていたのである。この宇沢さんの著書はおそらくは行政の人にも読まれたのである。随分と自動車空間と人間空間は分離された道路の構造になってきた。しかし、なお、名古屋の町でも、憎い車が歩道にはいつてきて、堂々と違法駐車をするようになってきた。何のためにガードレールが設置されたのかわからなくなる。車がガードレールの内側を我が物顔で走行し、果ては一晩中、違法駐車を繰り返すのである。ひとびとが愉快に暮らせないなら、自動車は考えものである。利己心はどこかで他人を傷つける。まさに、経済とはパラドックスの固まりである。

市場も共同体の外部で発生したのではない。交換が市場での人間行動の基本だとしたら、その交換は、共同体の内部の贈与行為によって生まれたのである。人間は、共同体を離れては生きてはいけない。では、共同体と自然の関係は、私の贈与理論で分析するとどうなるか。人間は自然に何かを贈与するから、自然からの恵みを反対贈与で享受するのだろうか。なにを贈与するかといえば、自然にたいして、自分の労働を贈与するのであ

る。労働した自然に対しては占有の意識が芽生える。負の贈与というのもある。例えば、他人の家にドロボーにはいつて盗む行為が負の贈与、つまり略奪である。自然には、人間が知らず知らずのうちに負の贈与をした場合がある。例えば、最近、「永田農法」が雑誌等で紹介されることが多くなったが、ハマチの養殖のために海を囲って魚に餌を与える、あるいは自然を囲って、植物に過剰に有機肥料を与える、ところが魚や植物は餌を残す。これが自然に対する破壊行為となり、生き物が生存できる環境が壊れる。人間は、汚れた自然を見てがっかりする。いやな感情を抱く。これが負の贈与の連鎖反応である。けれども、ここでも、人間の行為としての贈与を、自然と人間の関係にまで拡大解釈してよいのかという、自問自答を繰り返しては悩んでいる。人間が森を歩くという行為一つをとってみても、人間は小動物を踏みつけて、自然を破壊して道を作る行為をしているのである。そう考えると、経済とは多かれ少なかれ自然破壊の行為でもあるのである。しかし自然は人間を癒す。だから自然はありのままの姿で残した方がよい。藤前干潟を残そうと市民が運動をおこしたのは、自然と人間の関係に破壊行為を避けようという知恵が働いたためである。そのため、ゴミが捨てられなくなった。ゴミを少なくする努力を、今度は人間の側がしなければならなくなって、わたしなどは松原市長と同じく、生ゴミを有機肥料に変える努力を始めた。過剰な肥料の投与は自然への破壊行為だというのはつい最近、「永田農法」の雑誌記事で知ったことだが、自然保護の意識はさわやかな気持ちにさせる。おそらくは、人間の意識革命がこれからも必要になるだろう。

う。人間の欲望の一つに、どうも、自然の中で楽しみたいというものがあつたとしてもいいべきか。正の贈与がコミュニケーションの有効な手段であるように、自然にも、何をすれば自然が喜ぶか、ない知恵を絞る努力が経済学者のみならず、生活するすべての人に問われているのである。従来狭い利己心の人間像は、経済学の理論から排除される時期が迫っている。

とりとめない「環境と経済」という雑文であつた。昨日も町を歩いていて、自転車をこぎながらタバコを喫っていた青年が、火がついたままのタバコを平気で投げ捨てる場面を見ました。思いやりの心を育てるといふ基本が、大学でも地域でも家庭でも、今こそ必要とされている時代はないであらう。

(応用経済理論・経済原論)